

# 醫師の立場より見たる幼稚園と急性傳染病(承前)

醫學博士 島

信

## 四、流行性耳下腺炎(阿多福風)

本病は春秋に多く、散在性又は流行性に學令兒童を好んで侵すもので幼稚園小學校寄宿舎等に流行することがある。乳兒及大人の罹患することは稀である。本病に罹患すれば終生の免疫が得られる。

潜伏期は長く十八乃至二十二日である。即ち感染の機會があつてから忘れた時分になつて發病して來るものである。

前驅症は有ることも無いこともあつて不定であるが多くは一兩日不機嫌、食慾不振、頭痛、嘔吐

下痢等を來し或は此と同時に發熱する。

特有な症狀は耳下腺の腫脹と壓痛とである。兩側に來ることゝ一側だけに濟むことゝあるが、多くは兩側で然かも一方の腫脹が局度に達した頃から他方が腫れて來る。腫瘍の大きさは不定であるが下顎骨下行枝と顎顚骨の乳嘴突起との間の耳下腺の部位に限局し時としては上下に擴がり耳朶は上方或は側方に壓排され顔貌は特有な阿多福となる輕症では疼痛はなく僅かに壓痛があるだけであるが、時には疼痛を訴へ殊に開口咀嚼時に疼痛を訴へる。熱は腫脹が始まると同時に三十九度内外に昇り二三日で下降し同時に腫脹は漸次減退する。

一側性のものは五六日兩側性のものは十日乃至十二日位で全快する。時には二三週後に再發することがある。

合併症として稀ではあるが男兒では睪丸が腫脹して疼痛を訴へることがあり、女兒では卵巢が腫脹して腹痛を訴へることがある。

傳染は空氣傳染で人から人に傳染するものであるが病原菌は今日尙不明である。

## 五、赤痢及疫痢

赤痢。此は主に夏季に流行する小兒に多い傳染病であるが散在性には冬季でも比較的多數罹患するものである。病原菌は赤痢菌であるが此れは多種あつて一様ではない。

傳染は大便に排出された微菌が蠅其他の媒介で汚染された飲食物の攝取により或は手指が汚染され徑口的に起るもので赤痢菌が大腸に繁殖して發

病するものである。

幼兒は屢々高熱痙攣で發病することがあるが一般には下痢で始まる。大便は初めは粘液性軟便であるが次で粘液血便となり次で膿性粘血便或は膿性粘液便となり椗の花の様な惡臭のあるのが特徴である。排便時下腹部の疼痛即ち裏急後重（シブリ）があり排便量は僅微で回数多く時には一日五十回以上に及ぶことがある。熱は始め四五日三十八度前後のものが續き解熱するが幼兒では初め中毒性の高熱が二三日續いて解熱し數日後又三十八度前後の腸性の熱が二三日出ることがある。重病では一ヶ月も熱が經續し衰弱が加はり患兒も醫師も弱らされることもある。然し一般には一週乃至二週で全快するものである。

疫痢。此れは名古屋の颯風病（ハヤテ）四國の早手、九州の急症等と言はれて居るもので赤痢との異同に就ては多年學會の問題となつて居る。疫痢

を獨立の疾患であるとする學者は赤痢菌と全然異  
 た大腸菌を病原と認めて居るのである。然し近年  
 は赤痢と同一疾患であつて疫痢は症候名とする學  
 者が多いのである。疫痢症狀を呈した患者に多く

の場合赤痢菌が證明され、又初め疫痢症狀のもの  
 が次で赤痢症狀を呈することが多い事と、臨床上  
 確かに赤痢であつて赤痢菌の證明されない場合も  
 多いので、疫痢症狀のある患者で赤痢菌が檢出さ  
 れなくても直ちに赤痢に非ずと斷言することは早  
 計である。此等の理由で私も疫痢は主として小腸  
 を侵す赤痢であると考へて居る者である。小腸に  
 赤痢菌が繁殖し此所を侵す爲めに中毒症狀が大腸  
 を主として侵された場合よりも強いのである。同  
 じ赤痢菌で如何して疫痢症狀を起して來るかと言  
 ふと此れは年令と體の素質によつて主として小  
 腸が侵されるものと考へられる。即幼兒三才乃至  
 六才のものに疫痢が多く又丈夫さうに見へて居て

然かも抵抗力の弱い弛緩性體質と言はれて居る  
 ブクブク」肥りの幼兒が侵され易いのである。

本病は赤痢同様夏季に多いが冬季にも比較的多  
 いものである。

症狀としては元氣よく遊んで居た小兒が急に元  
 氣がなくなり「ゴロゴロ」する様になり急に發熱す  
 るもので多くは四十度前後となる。皮膚は蒼白、  
 四肢厥冷、脈搏微弱頻數となり眼球上竄し痙攣を  
 起し意識は溷濁し嗜眠乃至昏睡状態となる。始め  
 多量の軟便を出すことが多く後は黄色或は縁黒或  
 は縁褐色の液粘便となり血液を混ずることはあつ  
 ても僅微で裏急後重を伴はない。又便の回数も少  
 く一日四五回である時には水様便の頻回排出され  
 ることもあるが稀である。多くは嘔吐を伴ひ初め  
 は食物の残渣次で胆汁粘液を吐し、重症では血液  
 を混じ珈琲残渣様物・混じたものを頻回嘔吐す  
 る。腹部は緊張弱くなり綿の如へ軟くなる。非常

に急激に経過するもので悪性のもものでは發病後十二時間以内に死亡することもある恐ろしいものである。従て早期に充分の手當をすることが必要で手當が遅れれば遅れる程豫後の悪いものである。

赤痢疫痢何れの場合に於ても未熟の果物不消化物の攝取、過飲、過食、寢冷等が誘因となるものである。

豫防としては患者の隔離が重要なことは勿論であるが平素便所の消毒を怠らぬ様にし夏季には蠅の驅除に注意し小兒には殊に夏季には家庭に於て調理したもの以外は飲食せしめぬ様にし飲食物の調理に注意し調理者は勿論食物を取扱ふものゝ手の消毒を嚴重に飲食物の汚染されぬ様にし過飲暴食を嚴禁し寢冷をさせぬ様胃腸障害ある場合には軽い内に早く完全に治療して置かねばならぬ。又大人の赤痢は非常に軽く済むことがあり一日數回下痢して居るだけで其れが赤痢であることがあり

此れが幼兒に傳染して赤痢疫痢を起すことが往々認められるから大人が下痢をして居る時には單なる腹下しと油斷せず早く全治せしむる様醫療を受け殊に便所や手の消毒を嚴重にすべきである。

## 六、腸チフス及バラチフス

バラチフスにはA、Bと二種あるが此れは病原菌の性質が異なるもので腸チフス及バラチフスA、B何れもチフス菌屬で起るもので症狀は大同小異である。概してバラチフスの方が軽いが経過も同様である。赤痢が大人に軽く小兒に重いのと反對にチフスは一般に大人に軽く小兒では軽く腸出血等を起すことは殆どないと言つてよい程である。學令以上の小兒に多く幼兒には稀である。此れ幼兒に於ては感染の機會少きを爲めである。

チフスの傳染は經口的に起るもので患者の大便に排出されたチフス菌によりて汚染された飲食物

によつて傳染するものである。

症状は頭痛、倦怠、食欲、減退睡眠不安等の症状を以て發熱する。熱は徐々に罹り一週乃至一週半の後四十度前後となり朝夕一度以内に弛張する稽留性熱となり十日乃至十八日位續き漸々解熱する。脈搏は大人チブスに於ては高熱に比して緩徐なるが特徴なれども小兒に於て脈搏は熱に相當して多いのが普通である。強い神經症狀即ち嗜眠譫語等を起すことがあるが大人に比して少い。時には腦膜炎症狀を起すことがある。下痢、嘔吐、鼓腸等胃腸症狀の強いこともある。要するに小兒チブスは大人の場合の如く一定の症状なく不定で診斷困難で不明の熱が續くので疑ひを起し血液検査によつて始めてチブスの診斷される様な場合が屢々ある。

豫防法は赤痢と同様である。即ち飲食の注意と患者の隔離とによるのである。(未完)

### 木下一雄氏著「幼稚園實際的保育學」

木下一雄氏の新著「幼稚園實際的保育學」が刊行せられたことは、我國保育界にとつて、最も欣ぶべきことである。著者は我國教育界に篤學を以て著聞する人、殊に前に東京府立女子師範學校附屬幼稚園主事として、斯の教育の實際につき豊富なる經驗を有する人であるから、其の所説の價値に就ては、敢て多言を費すまでもないが、此書の全體の組織及び問題の取捨が幼稚園教育者としての實際能力を與ふる上に最も適切なるよう苦心せられてあることは、殊に深く敬服するところである。また、此の點に於て讀者の與へらるゝ利益を信じて疑はぬのである。保姆養成所の教科書として適當であると共に、廣く保姆諸君の好參考書として奨めたい。

(倉橋生)